

子宮内挿入避妊器具による受胎調節法の臨床的研究

特に避妊リングと避妊ウイングとの比較について

昭和34年10月27日 受付

松本市鈴木産婦人科医院
鈴木章平

Clinical Studies on the Birth-Control by Means of Intrauterine Contraconceptive Instruments.

Especially on the Comparative Studies of C. C. Ring with C. C. Wing.

by

Shohei Suzuki

(Suzuki gynecological Clinic, Matsumoto.)

緒言

戦時中の生めよふやせよは戦後は一転して産児調節に力を致さねばならぬ世とはなつた。国土の縮小もさることながら、国民経済の貧困と相俟つて現在の風潮がそうさせるのであろうか—とにかく各種妊娠防止の手段は枚挙にいとまのないほどであり、一方また人工妊娠中絶の増加と共にその障害例も多く、簡便かつ確実な避妊法の出現が現在ほど望まれている時はないであろう。

妊娠中絶の諸問題は暫くおき、産児調節が妊娠防止の方向へ指導されねばならぬのは当然であつてそこに各種の方法、器具、薬品等が絢爛と花開いているわけではあるが、このきらびやかさは他面から見れば決定盤がないということであり、それを裏書きするかのやうに各種避妊法の普及状況は未だしの感を深くするのである。いわんや下層労働者階級に於いて更にそれが甚だしいにおいておや。ひるがえつて子宮内に挿入する避妊器具は木田氏による改良普及の努力にもかかわらず全く無害といふ切れず、昭和11年、当時の国情と相俟つて内務省令第15号により一切販売、使用を禁止されたのであるが、戦後前記のような情況下において最近その使用経験の報告例も漸く多く、成功、不成功を問わず一応再度脚光を浴びるに至つた有様である。更に木田式リングを始めとする金属製品は種々の障害例も多いところから、ナイロン製品に改良され、その形も各種各様であり、遂に最近ではY字型のウイングと称する器具が出現し効果の確実性と共に副作用の少ないことを謳っている。戦前からの先入観念もあり、現在これら器具は正式に認可されて居らぬ故もあつてその使用にはやゝ躊躇を感じたのは別に筆者のみではあるまいと思うが、患者の希望もあり医師治験用と銘打つた器具の宣伝につれて次第に使用例も多くなつたの

で一応こゝに一括御報告申上げて御批判を頂こうと考える次第である。

症例分類および調査方法

筆者の症例はまだ少なく全部で108例である。そのうちリング使用者65例、残りの43例はウイングの使用である。最近約1年間は殆どウイングのみを使用し現在挿入中のもの39例であるが挿入1年未満の30例は皆ウイングであり1年以上経過している9例のうち4例はリングを使用してある。更に同一人で2回挿入したものの24例、3回挿入した者7例を数える。全症例を経産回数によつて分類すると次の第1表の通りである。妊娠4回以上の者があまり多くないのは、彼等

第1表 症例分類

未妊娠婦	11
経妊未産婦	18
分娩3回以下	58
分娩4回以上	21
計	108

には大多数永久避妊を薦め出来るだけそれを実施するようにしているためである。なお人工妊娠中絶回数は最少0最高11回で、平均3回となっている。

使用のリングは殆ど全部がナイロン製歯車型のもの、一部はゴム製を使用してみた。最近ウイングに替えたのは使用成績もさることながら挿入および抜去が容易かつ殆ど無痛であるためである。

患者は器具挿入後先づ翌日来院させ、器具の位置、出血の状況、疼痛の有無を検し、特別に異常なければ初回の月経が落ちた後にもう一度来院させることにし

ている。最初の月経時にはやはり位置が狂うことが多いと思われるためである。それ以後は内膜の発生、発育と共にその中に埋まるようにして器具が静止するようになると思われるので、さほど位置が移動することは少ない様子であるが、出来るだけ4ヶ月に一度位は来院させる方針にしている。器具には全部ナイロン糸をつけそれを外子宮口部に出す位にしてその部で切断しておき、位置が下降した場合の目標とし、同時に抜去に際して利用している。大部分の患者は4~6カ月毎に一度位は来院するが、時とすると抜去の時まで一度も顔を見せぬ者があり、また遂に来院せず多分他の医院にて抜去して貰ったか、或いはそのままか不明なものもある。これら挿入器具は子宮内で時の経過と共に次第に変質硬化するを常とするので大体1年位で一度抜去し、もし希望あらば1~2カ月経てまた挿入するのがよいとされている。さもないと、種々の障害が増強してくるおそれがあるのである。さてこのようにして経過観察をする場合1年を限つて成績を出すのが最も妥当と思うのであるが、抜去までまだ期限があり、途中の検査に来院せぬものも全例中に入っている。定期検査で各種成績の判明したものはそれぞれの項に分類し、まだ挿入後観察する機会のない者および1年以上経過し当然抜去に来院しなければならないのに音信不通で成績不明な者を「不明」の項に入れたが、本当の成績不明は当然後者のみを指すべきであろう。

調査成績

以上のような調査方法により全例を成功、不成功、さらにそれぞれ細目に分類して示したのが第2表である。前項に述べたように「不明」の欄は真正の不明の他に観察期間が短いために未だ調査に来院せぬものをも含んでいるのでウイング挿入例の成功例はなお幾分

かは増加するはずである。観察期間は1年を以て限度としてあるので再度挿入したものは2例または3例として計算した。但し非常に経過がよしいために1年を超えたに拘わらずなお暫くそのまま経過を観察することにした9例(前項参照)は特別例外とした。リングは全例1年以上の観察を行つてあるが、ウイングは一部は1年以上、他は1年未満(前項で述べた30例)で、そのうち約半数は半年経過している処である。分類の細目を煩雑にしないように各観察期間別には敢えて分けなかつたし又、1年未満に妊娠希望のため抜去したものや、更新その他の理由で除去したのも特に障害のない限り「異常なし」の項に分類した。

1) 有効例について

「異常なし」は従来の状況に比し殆ど見るべき変化を来さなかつたものであるから、例えば元来月経痛があつた場合はそれが特に増強せぬ限りは異常なしとして認めてある。挿入当初相当の苦痛があり、抜去しようとして考へたのが、月日の経過と共に次第に軽減し、結局1年間を挿入したままで経過してしまつたものは「軽度の障害あるも除去せず」の項目に入れ一応成功例とした。成功率は名和-原田の63.5%、高橋他の60.4%より稍好結果を得ているようであるが、筆者の感じではウイングの方は不明例を入れて明確な結論が出れば更に高い成功率を挙げることが出来るように思う。諸家の言うように熟練する程成功率を高く出来る事は想像に難くないので、器具の改良と相俟つてもつとよい率を上げ得よう。

2) 不成功例

障害が重くて遂に抜去せざるを得なかつたものは後に障害例として分類記述することとする。妊娠の1例は1年以上放置されていたもので、いわば当方の責任保証期間は過ぎたものであるが一応この項に分類した。また自然脱落例には妊娠のため中絶施行の際、遂に器具を発見出来なかつたので、既に器具が自然脱落していたため妊娠するに至つたと思われるものを含めてある。不成功例は約10%に上るが、そのうちでもウイングの失敗率は相当に少いので、更に種々検討を加えればもつとよい成績が出ると思う。しかしリングとウイングの間に有意の差が認められるかどうか特に検定を行うことはしなかつた。

3) 障害例

これは成功例、不成功例を問わず、一括して各症状別に分類してみた。1人で2つ以上の愁訴を持つものもいるので各障害の総計は先の成績表の障害ある例の合計より多いことになる。各障害例は共通に言えることは器具の大きさの不適、位置の異常、挿入時期の不

第2表 リングとウイングの使用成績、()内は%

	総計	成功		不成功			不明
		異常なし	軽度障害	障害重篤	妊娠	自然脱落	
リング	65	45 (69.2)		9 (13.9)			11 (16.9)
		25 (38.4)	20 (30.8)	5 (7.7)	2 (3.1)	2 (3.1)	
ウイング	43	27 (62.8)		3 (7.0)			13 (30.2)
		20 (46.5)	7 (16.3)	2 (4.7)	1 (2.3)	0 (0)	
計	108	72 (66.6)		12 (11.1)			24 (22.2)
		45 (41.6)	27 (25.0)	7 (6.5)	3 (2.8)	2 (1.8)	

第3表 障 碍 例 分 類

	出(月 経延 長を 含) 血	帯 下 増 加	疼(月 経 痛 を 含)	月 経 過 多	発 熱	
リング	25	9	14	7	5	0
ウイング	9	4	5	2	2	1
計	34	13	19	9	7	1

適、挿入直後の労働や性交、定期診察不履行、1年以上の挿入例などはどうしても具合の悪いことが起つたり、起りやすいという点である。その点を考慮すると成功率は更に向上するものと思われる。敢えて抜去するほどでなくとも帯下の増加は非常に多い障碍と思われるが、これは個人により神経質な人とそうでない人とはそれぞれ訴えが違うので一概に言うことは出来ない。

これらの障碍に対しては安静を命じその症状によって子宮収縮剤、止血剤、鎮痛剤などを使用し更に位置の矯正なども施行したが大多数は時の経過と共に軽減するようであった。障碍が強くと遂に抜去しなければならなかった不成功例はみな1年以内であつて、1年を無事経過し、次に再度挿入時に障碍が起つたものはない。

リングとウイングの比較

この両者を比較して甲が乙より優れていると結論してしまうのはあるいはまずい事かもしれない。最後の結論は読者自身に委せるとして種々の観点から両者を比較してみよう。

1) 挿入および抜去：リングは径22~24mmの歯車型であるので挿入に際し子宮口を相当に開かせねばならず、かつ挿入器具が思うように動いてくれずちよつと困難を感じたがウイングはY字型であるため先端をつぼめれば容易に挿入出来、挿入器具の装作の簡便と相俟つて子宮口の開大もヘガールの6号程度で済みそれだけ患者の苦痛も少いようである。抜去も円型のものを抜くよりY字型のものの方が楽で、附属のナイロン糸を引張れば殆ど抵抗なく出てくる。

2) 避妊効果：両者殆ど伯仲していると考えてよいが、子宮腔の形状が明確に判らないのにその中央にうまく固定させるのは仲々困難であつて、知らぬうちに位置が狂い易いように思われる。その点ウイングはY字型の両脚が開いて両卵管角にひつかまるように固定されるので位置はあまり狂わないのではないか。その

ためかリングの方に自然脱出や、位置異常のためと思われる障碍例が多かつた。

3) 消毒：リングは煮沸滅菌が出来るが、ウイングは数分間ヨーチンに浸けるだけであるので、気分的に煮沸の方が完全に消毒出来るような感じを受けるのであるが、両者共感染について特別な障碍例を経験しない。ウイングに1例だけ発熱、下腹痛を訴え一時器具を抜去して治療に専念させたものがあつたが、ウイングが直接の原因なのか、たまたま起つた炎症がウイングあるがために一層増悪されたものか不明である。

4) 障碍例について：リングの歯車のようなギザギザは昔の金属リングのラセンの代用とでもいうべきものであろうか、必ずしも滑かな円周を持つていても避妊効果に大差はないように思われるのであるが、ゴム製の円形リングよりは脱出が少ない利点は保全しているようである。然しこれがために内膜に与える刺戟は強かつ障碍殊に生殖器出血等はやゝ増強されるのではなからうか。ウイングの内でも周囲に突起物のついたのがあつたが、試用経験はないが何となく障碍があるような気がしてならない。ウイングでも腹痛および緊満感が強くと遂に抜去した例があるから一概には言えないが、器具の大きさ、挿入時期、位置の適正を注意すればどうもウイングの方が使い易いように筆者は思う。また1年経過して抜去した時に器具は幾分硬化しているものであるが、ウイングは材料の関係かその程度が軽度であるように感じた。たゞこれが障碍と直接関係を有しているものかは不明である。

考 按

子宮内挿入避妊器具が販売を禁止されたのは当時の国情もさる事ながら種々の障碍例が報告されてきたからに他ならない、しかし、これらは当時の古いリングに属し、その後の使用材料の変革、形態の改良等を考える時、いつまでも古い先入観点にこだわつてばかりいるのもどうかと思われてならない。各種の避妊具、避妊薬は素人が何ら危険なく使用出来る点を最大眼目として製造発売されているのであるが、何分にも失敗率が大きく、その都度使用するわずらわしさが強く、憶劫に感ずると同時に荻野式による不妊日の算定に基づく器具不使用が案外失敗率を高くしているのかも知れないのである。その点子宮内に挿入すれば抜去しない限り必ず使用しているわけであつて、存外な避妊効果が期待出来るのではなからうか。いくら安全な方法でも使用されなければ無意味であり、失敗する都度、中絶を希望するのではむしろ患者の健康上憂うべきものがある。現在のナイロンリングはかつてのように分解

して子宮筋層内に迷入する事も少なく、ウイングまた然りであるので、患者によく理解させて厳重に監視するならば、当時のような事故はあまり考慮しなくてもよろしいように筆者は愚考するのである。然も避妊効果もほぼ良好であり、障害も思つたより少なかつたのは筆者も意外かつ嬉しく感じたところである。該器具挿入による癌発生の問題は賛否多数の意見があつて一概には結論出来ぬが、兩三年程度の挿入であればまず心配のないような意見が多い様子であるので、例えば永久避妊を望む場合等は当然手術を薦め、産児の時期的調節、永久避妊手術をする都合よき時期に至るまでの一時的のぎとして利用するなれば相当有効なるものと思う。

なお多数の例を得て、各器具の優劣、挿入の時期および方法、観察、又管理の問題、障害の防止法、治療法等確立されれば、我國人口問題の上にも何らかの貢献をなすのではなからうか。一般避妊法の普及や器具の販売等は主に婦人会などを通しての素人の手に委ねられることが多く、どうしても徹底を欠くうらみが多く、殊に最も産児調節を要する層に浸透せず、また男性専横の習慣よりしてその協力、同調を得られずに失敗を重ねる事例も屢々耳にする処である。この際国家的見地から本器具を適正に批判されることを希望してやまぬものである。

結 論

- 1) 純臨床的な立場から子宮内避妊器具を論じ殆ど一般避妊方法より優つていると推定出来る成績を得た。
- 2) 不成功例もまた種々検討してみればその数を減らすことが出来るものと思う。

3) 本器具の使用に際しては医師と患者の緊密な協調と努力が成功の鍵であると思う。

4) ナイロン歯車型リングはそれ以前の各種リングに比し数等の好結果を得ている処は既に各文献に明らかであるが、最近のウイングによる症例を追加し両者を比較検討した。

5) 最後に、敢正なる批判と観察に基く、本器具使用基準とも称すべきものを制定し、産児調節を軌道にのせたいものと希望してやまない。

参 考 文 献

(50音順)

- ①石浜淳義：避妊リングによる障害について、産と婦 20, 714, 1954
- ②石浜淳義：受胎調節法としての避妊リング使用の経験、優生リング研究資料、優生リング総合研究所発行
- ③大森北四郎：太田式ナイロンリングの経験、産婦の実際 4, 590, 1955
- ④神山光輔：避妊用リング使用患者の症例について、産婦の世界 5, 470, 1953
- ⑤沢崎千秋：子宮内挿入避妊用器具について、日婦会誌 32, 1576, 1937
- ⑥鈴木武徳：避妊リング使用成績調査、優生リング総合研究所発行
- ⑦高橋順昌他：避妊用リングの転位による障害症例および我等の避妊用リング使用成績、産と婦 3, 204, 1954
- ⑧田中雄吉他：避妊リングの経験、産婦の実際 3, 415, 1954
- ⑨土居淳：子宮リングの臨床成績、日不妊学誌 2, (2), 6, 1957
- ⑩名和祐郎他：避妊リングの使用観察、産婦の世界 9, 1008, 1957
- ⑪橋本清他：避妊法としての太田リングの経験、産婦の実際 1, 395, 1952
- ⑫藤森博他：避妊リング挿入子宮の組織学的変化について、産婦の世界 9, 1038, 1954
- ⑬松本薫：避妊用リングを中心とする子宮筋腫例、産と婦 16, 548, 1949